

和歌山県

10・9・8・7・6・5・4・3・2・1・0
ワーと歓声がおこりました。西国 2 番札所紀三井寺仏殿がピンク色に浮かび上がったのです。



アメージンググレイスの曲が流れ shizu さんの歌声でさらに心がピンクに響きました。

和歌山県は世界で初めて乳がんの麻酔手術を行った華岡青洲の生まれ故郷です。今回、ピンクリボン活動を熱心に行っているボランティアグループのピンクリボン運動 in 和歌山実行委員会の方々と協力しながら、乳がん撲滅の日臨技公益委託事業を行いました。

10 月 3 日(土)午後より映画「余命 1 ヶ月の花嫁」を上映しました。この映画は皆さんご存じのように若年性乳がんとの闘い、わずか 24 歳の若さで他界した長島千恵さんの余命 1 ヶ月を描いた感動のストーリーです。皆さん目に涙をためていました。続いて、会場を紀三井寺仏殿前に移し、遠く淡路島に沈む夕日のなかでピンクリボン点灯カウントダウンイベントが始まりました。二胡の音色が幻想的につつま、副住職の命の講和で心が満たされ、会場全体が一つになりました。

231 段の急な石段を降りて振り返ると、中秋の名月と共にピンク色のリボンが、乳がん早期発見・早期治療撲滅を啓蒙啓発していました。【中村好伸】

岡山県

津山市は県北西部に位置し、今回の市民公開講座は津山市を中心とする近隣地域にも広報を行い開催した。



当日は 20 歳代から 80 歳代まで幅広い年代層の市民の方の参加があり、中でも 40 歳代、50 歳代の女性がめだつた。

近年、乳がんは増加傾向を示し死亡率も年々上昇している。乳がん検診の受診率が米国や英国では 70~80% と高いのに比べ、日本では 20% 前後と低いのも実状

であることから、公演中には早期発見、自己検診、検診と言う言葉が随所に聞かれた。日本人女性 20 人に 1 人がかかる身近な病気とも言われていることから、月 1 回の自己検診、年 1 回の検診を受けることの重要性を市民の皆様へ改めて認識していただけたものと思っている。

今回、厚生労働省より検診対象年齢者に無料クーポン券の配布がなされており、対象者には是非検診を受けていただくことをアナウンスした。【山田啓輔】

徳島県

9 月 27 日(日)、徳島県南部の阿南市で開催された健康まつり会場にて「乳がんの早期発見」と、その講演会についてリーフレットを配り、広報活動をしました。

この健康まつりは毎年行われているもので参加者も多く、たくさんの方が集まるイベントになっています。

10 月 4 日(日)、徳島市「ふれあい健康館」にて市民公開講演会を開催しました。

講演は徳島大学医学部、胸部・内分泌・腫瘍外科の長尾妙子医師にお願いしました。乳がんの早期発見の重要性と自己検診の方法についてわかりやすく説明していただきました。後半は患者の会(あけぼの会徳島)より 2 名の患者さんに、ご自身の体験から早期発見の重要性と発症後の過ごし方など、経験者ならではの内容でお話しをしていただきました。



講演会に参加した方には、臨床検査技師は超音波検査や血液検査を通じて、ガンの発見、経過観察に重要な情報を提供していること、またガンは他人事ではなく自分のこととして関心を持ち早期発見に努めることが大切であること、などを知っていただくことができました。

【高松典通】

大分県

今回、大分県臨床検査技師会は、日本対がん協会とリレーフォーライフ大分実行委員会が主催する「リレーフォーライフ大分 2009」に参加した。このイベントはがんの宣告を受けた患者さんと共にグラウンドを 24 時間歩き続けることによって、がん患者の 24 時間の病気との闘いを支援しようというもので、技師会の他、各医療団体、病院、患者団体など 58 チーム、延べ 4,500 人がタスキをつないだ。



全国各地で開かれたリレーフォーライフの中で最も大きな大会となった。

私も 24 時間参加した中で、何人かのがん患者さんと話をした。その中で、がんという病気が患者の人生に与える影響の大きさ、その診断にかかわる我々の責任の重大さを痛感した。臨床検査技師はがんを早期発見し、少しでも多くの患者さんを救う役割を担っている。そのためにも日々研鑽を重ね、努力する必要があると改めて認識したイベントであった。

【境 一】

…拾った話題!…

小さな親切、大きなお世話 自国内で解決できる幸運

最近、産経新聞に作家曾野綾子氏の「小さな親切、大きなお世話」が掲載されていた。日本がありがたい自然環境にあり、周りの殆んど全ての問題が自国内で解決可能とされるが、多くの日本人はそれを考えたことがないという文であった。今、地球規模で環境問題が論じられているが、自国の経済などに左右されて本質の論議には届かないのが現状であろうが、時は否応なしに刻まれているのである。

幾つかを紹介する。

◇ 日本を含む東南アジアで時々激しい夕立に遭うと、サウジやクウェートの人はこれを見ただけで腹がたつだろう。

それらの国は、地下に莫大な石油が眠っていても、降雨量は極めて少ない。野菜は温室ならぬ人口冷室の中に植え、その 1 本 1 本の苗の根本に、1 滴ずつの真水が垂れるようになっている。水は海水を真水に変える操作が要る。オイルはマネーになるが、人間はオイルを飲んでは生きられない。天然の水が供給されることはイスラムの人の概念からいっても天国の境地なのである。

◇ 南アフリカ共和国の北東部にはクルーガー国立公園という長さ 320km、幅 80km の野生動物保護区がある。ここは、ジンバブエやモザンビークと国境を接しているが、この隣接した国から難民が流れてゆく。難民は地続きならどこへでも戦火を逃れて移動する。そのため、迷い込んでライオンに食べられる者もいるという。ところで、日本の難民認定数は 100 人以下で、世界の認識には遠く及ばない。